那珂81

— 那珂遺跡群第173次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1392集

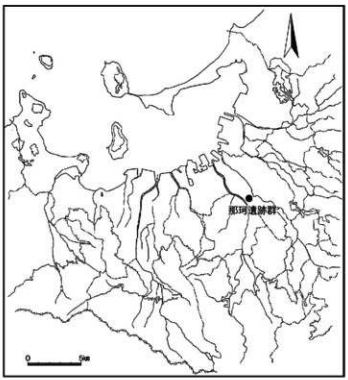
2020

福岡市教育委員会

那 珂 81

― 那珂遺跡群第173次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1392集



遺跡略号　NAK－173
調査番号　1803

2020

福岡市教育委員会

序

北部九州は玄界灘を介して大陸・朝鮮半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも福岡市には、旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は共同住宅建設に伴う那珂遺跡群第173次発掘調査について報告するものです。この調査では弥生時代～古墳時代の遺構・遺物が多数出土しました。

これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後本書が文化財保護についての理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社 トップ・プランニング様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和２年３月25日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市博多区那珂１丁目148、143において発掘調査を実施した那珂遺跡群第173次調査の報告書である。
2．発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3．報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4．本書に掲載した遺構・遺物実測・挿図の作成、および遺構・遺物の写真撮影は清金良太が行った。
5．本書に掲載した国土座標値は、世界測地系(第Ⅱ座標系)によるものである。
8．遺構の呼称は、竪穴住居をSC、井戸をSE、溝をSD、土坑をSK、ピットをSP、包含層をSXと略号化した。
9．遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
10．本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

遺跡名	那珂遺跡群	調査次数	第173次	遺跡略号	NAK－173
調査番号	1803	分布地図図幅名	東光寺37	遺跡登録番号	401320085
申請地面積	3542.4㎡	調査対象面積	315.0㎡	調査面積	301.0㎡
調査地	福岡市博多区那珂１丁目148、143			事前審査番号	13－１－233
調査期間	平成30年４月16日～６月18日				

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 5
　１．概要 …… 5
　２．遺構と遺物 …… 5
　３．結語 …… 12

挿　図　目　次

第１図　那珂遺跡群位置図（１/25,000） …… 3
第２図　調査区周辺図（１/4,000） …… 4
第３図　調査区周辺図（１/1,000） …… 4
第４図　調査区全体図（１/100） …… 6
第５図　SC030実測図（１/60）および出土遺物（１/３） …… 7
第６図　SC031実測図（１/60）および出土遺物（１/３） …… 8
第７図　SC042実測図（１/60） …… 9
第８図　SE012実測図およびSK032（１/60） …… 10
第９図　ピットおよび包含層出土遺物（１/３） …… 11
第10図　福岡市内出土牛角付把手１ …… 14
第11図　福岡市内出土牛角付把手２ …… 15
第12図　福岡市内出土牛角付把手３ …… 16

表　目　次

第１表　福岡市内出土牛角付把手集成表 …… 13

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区那珂１丁目148、143における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成28年７月25日付で受理した。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていること、試掘調査が実施され現地表面下約65cmで遺構が確認されていることなどから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成30年４月４日付で株式会社トップ・プランニングを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年４月16日から発掘調査を、翌令和元年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

2．調査の組織

調査委託：株式会社　トップ・プランニング

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：平成30年度・資料整理：令和元年度）

調査総括：経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課	課長	大庭康時（30年度）
		菅波正人（元年度）
	同課調査第２係長	大塚　紀宜（30年度）
	同課調査第１係長	吉武　学（元年度）
庶　　務：	文化財活用課管理調整係	松原加奈枝（30・元年度）
事前審査：	埋蔵文化財課事前審査係長	本田浩二郎（30・元年度）
	同課事前審査係主任文化財主事	田上勇一郎（30・元年度）
	同課事前審査係文化財主事	朝岡俊也（30・元年度）
調査担当：	埋蔵文化財課文化財主事	清金良太

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について事業主様をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事に終了することができました。ここに深く感謝します。

Ⅱ.遺跡の立地と歴史的環境

那珂遺跡群は福岡平野のほぼ中央に位置している。三方を三郡山系や背振山系から延びる山塊に囲まれ、北側に隣接する比恵遺跡群と共に東側は御笠川、西側は那珂川に挟まれた丘陵上に位置する遺跡である。その両河川の間には観音山や牛頸から派生して断続的に長く伸びる洪積台地が形成されている。比恵遺跡群とは浅い谷によって区分されている。那珂遺跡群の立地する丘陵は、かつての沖積作用によって細かい開析谷が複雑に入り込む丘陵である。また、この台地の南側は春日丘陵と連なり、比恵遺跡群、井尻遺跡、五十川遺跡、さらに南には須玖岡本遺跡を中心とした遺跡が広がる。比恵・那珂遺跡群の立地する台地は花崗岩の風化礫層を基盤に、その上に粗砂、細砂、腐食土層、阿蘇山の火砕流による八女粘土層・鳥栖ローム層が形成される。今回報告する那珂遺跡群第173次調査では鳥栖ローム層上面から遺構検出を行っている。

比恵・那珂遺跡群において、初めに遺構が確認されるのは弥生時代前期であるが、後期旧石器時代のナイフ型石器や彫器が台地縁辺の比恵第19次、那珂第38・41次で検出されている。縄文時代も同様であり、前期の深鉢が比恵第30次から出土しているが、散逸的な分布にすぎない。

これが弥生時代に入ると一変し、台地の縁辺部で竪穴住居や貯蔵穴といった遺構が拡がりを見せ、開析谷に面した斜面上には土器・石器・木器などを伴う包含層が形成される。那珂第37次では夜臼期から前期前半の２重環濠が営まれており、これに連続する時期に那珂第67次でも環濠と多数の土坑墓が造営されている。比恵遺跡群では北西部を中心に、貯蔵穴などが見つかっている。

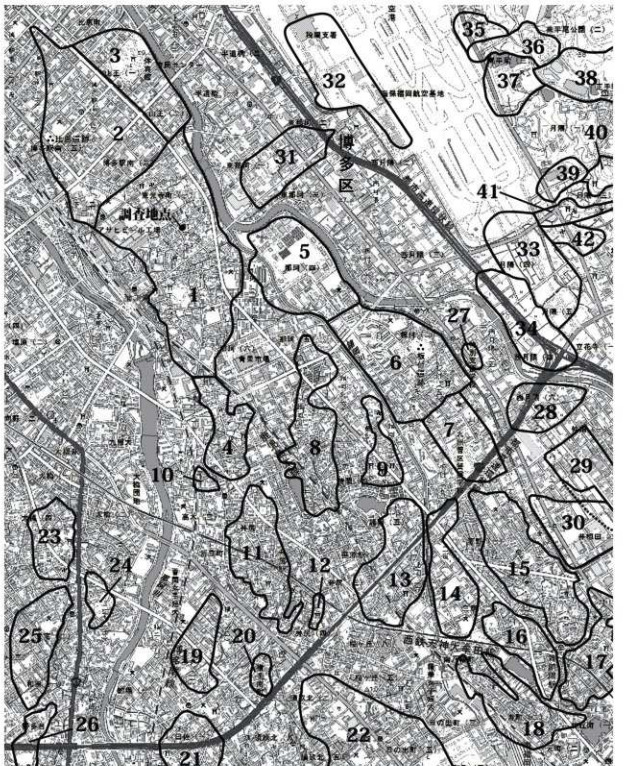
弥生時代中期に入ると竪穴住居・貯蔵穴等が各地に広がると共にこの頃から甕棺墓の形成も始まる。中期後半からは竪穴住居や井戸を伴う集落が拡がりを見せる。那珂第67次では弥生中期中頃～後半の多数の甕棺墓が検出されている。また、那珂第153・154次では弥生時代中期末～後期前半になると、２段掘りの大型溝が掘削されており、集落の環濠か、区画溝と推定されている。比恵第58次などで検出された南北方向の区画溝が縦断し、その周辺には掘立柱建物が配置され、青銅器生産関連遺物や舶載金属器が多く出土している。

那珂丘陵中央の尾根線上の最高所には、福岡平野では最も古い時期の前方後円墳である那珂八幡古墳が築かれ、主体部には木棺内に三角縁神獣鏡や玉類が副葬されていた。

古墳時代後期には剣塚北古墳の造営を契機として、阿蘇凝灰岩製の石屋形をそなえた横穴式石室を持つ前方後円墳である東光寺剣塚古墳が位置している。このうち、東光寺剣塚古墳は全長140m、３重の周溝をもつ筑前地域最大級の古墳である。また、古墳時代後期後半以降、大型の掘立柱建物や柵列が見つかっており、日本書紀宣化天皇元年（536年）条にみえる「那津官家」との関連が指摘されている。また、北側に位置する比恵遺跡群についても那珂遺跡群と同様に、少し遅れて掘立柱建物群が確認されている。那珂遺跡群第19・24次等ではこのころ出土する初期瓦は、比恵遺跡群では出土せず、掘立柱建物との関連が指摘されており、７世紀末から８世紀初頭には那珂遺跡群では寺院・官衙遺構が営まれている。

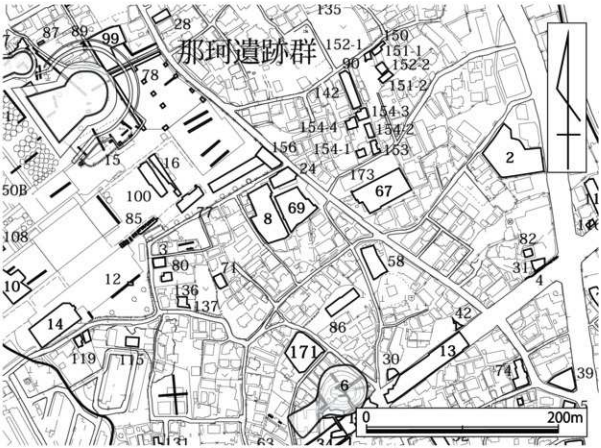
古代以降、比恵遺跡群で確認できる遺構の数は激減しており、集落の中心は那珂遺跡群に移行する。

比恵・那珂遺跡群周辺の遺跡では、板付遺跡があり、日本最古の水田遺跡、弥生時代前期の環濠集落などがあり、弥生時代前期末の甕棺墓から細形銅剣・銅矛が出土している他、弥生時代後期の竪穴住居からは小銅鐸が出土し、国指定史跡となっている。さらに南側の井尻遺跡では弥生時代の集落と甕棺墓が検出され、青銅器生産関連遺構やガラス勾玉鋳型が出土し、工房があったとされている。

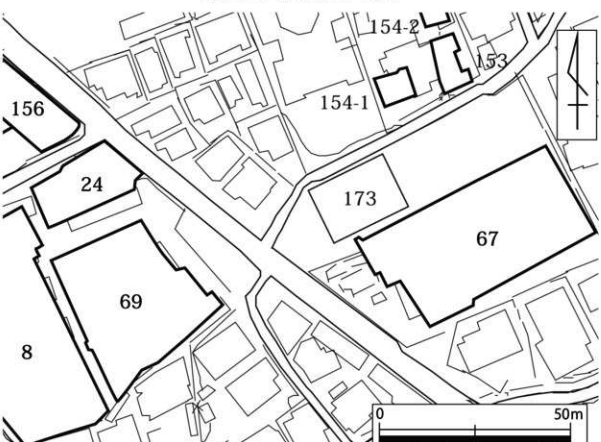


1.那珂遺跡群　2.比恵遺跡群　3.山王遺跡　4.五十川遺跡　5.那珂君休遺跡　6.板付遺跡
7.高畑遺跡　8.諸岡Ａ遺跡　9.諸岡Ｂ遺跡　10.井尻Ａ遺跡　11.井尻Ｂ遺跡　12.井尻Ｃ遺跡
13.笹原遺跡　14.三筑遺跡　15.麦野Ａ遺跡　16.麦野Ｂ遺跡　17.麦野Ｃ遺跡　18.南八幡遺跡
19.横手遺跡群　20.寺島遺跡　21.日佐遺跡　22.須玖・岡本遺跡　23.大橋Ｅ遺跡　24.三宅Ｂ遺跡
25.三宅Ｃ遺跡　26.野多目Ａ遺跡群　27.板付東遺跡　28.井相田Ｄ遺跡　29.仲島遺跡
30.井相田Ｃ遺跡　31.東那珂遺跡　32.雀居遺跡　33.下月隈Ｃ遺跡　34.立花寺Ｂ遺跡
35.久保園遺跡　36.席田大谷遺跡　37.宝満尾遺跡　38.宝満尾東遺跡　39.天神森遺跡群
40.下月隈Ａ遺跡　41.下月隈Ｂ遺跡　42.上月隈遺跡　●.173次調査地点

第１図　那珂遺跡群位置図（1/25,000）



第2図　調査区周辺図（1/4,000）



第3図　調査区周辺図（1/1,000）

Ⅲ. 調査の記録

1. 概要

今回報告する那珂遺跡群第173次調査区は、博多区那珂１丁目148、143に所在し、調査前の現況は標高約8.3mを測る。共同住宅のエントランスへ続く敷地内であった。調査地点は那珂遺跡群の中央部北よりに位置している。同じ敷地内南側の集合住宅では、第67次調査が行われており、弥生時代前期の環濠が発掘された。同様に北側では第153・154次、西側では第69次などの各調査が実施され、更にその周囲でも数多くの調査が進んでいる。

本調査区はアスファルト・砕石・客土の下、GL-65～75㎝に遺構面である、鳥栖ローム層がある。遺構面は東側が高く、西側に向かって緩やかに下る。遺構面の上には、以前の社宅の基礎、また現在使用中の水道管が残されており、重機で掘削する際には注意を必要とした。遺構面の標高は北西端部で7.8m、北東端部で8.0mを測る。前述のとおり、建物の基礎・配管により遺構面が壊されており、特にその傾向は調査区の南西・西・北西側で顕著であった。

遺構検出は鳥栖ローム層の上面までを重機で剥ぎ取って実施し、以下は人力によって作業を行った。今回の調査では、古墳時代初頭頃の竪穴住居、古墳時代後期以降の竪穴住居、井戸、溝、土坑を主体として確認でき、出土遺物量は、コンテナケースにして３箱である。

発掘調査は平成30（2018）年４月16日に着手した。まず、発掘器材やリース器材を搬入し、翌日に重機による表土剥ぎ取りから調査を開始した。その後壁面清掃、遺構面保護、世界測地系によるトラバース杭の設定等を実施し、遺構検出を開始した。順次、南西側から検出遺構の掘り下げや写真撮影、１/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了したのに合わせてスカイマスターによる全体写真の撮影を行った。その後、残る図化作業や個別遺構写真撮影を終えて、重機で反転した。反転後は、同じように検出遺構の掘り下げや写真撮影、１/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げの作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了したのに合わせて、南側の共同住宅の上階から全体写真の撮影を行った。その後、残る図化作業や個別遺構写真撮影を終え、片付け、土器洗いをして、６月18日に第173次調査を終了した。なお、調査終了前の埋め戻しは業者との打ち合わせの上、新しく建物を建てるには旧建物の基礎を撤去する必要があったため行っていない。

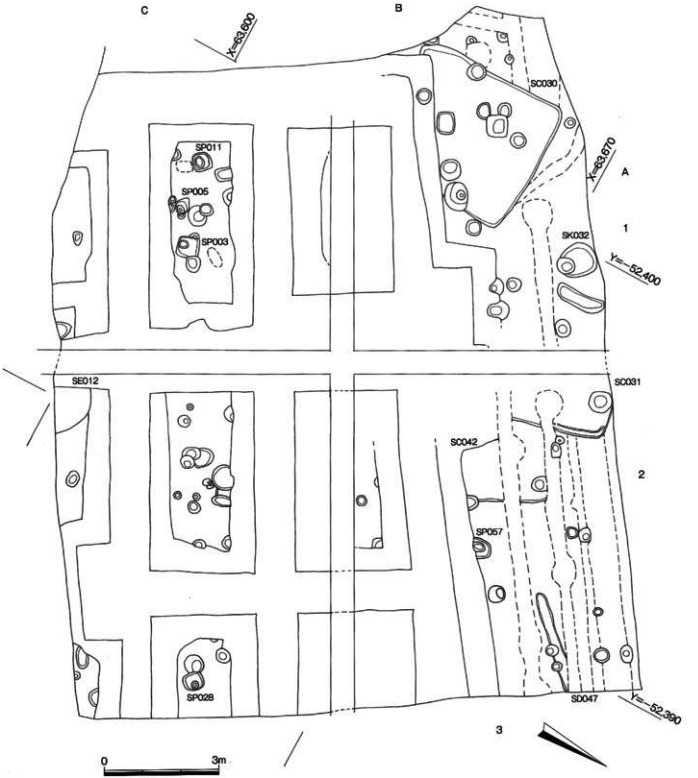
調査対象面積は、315㎡であったが、隣接する共同住宅、また前の建物基礎の関係で今回実際に作業を行った面積は301㎡であった。調査時の遺構番号は、001から３桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、竪穴住居内の施設については、報告の便宜上必要に応じて遺構毎にＰ１から順に番号を付した。

2. 遺構と遺物

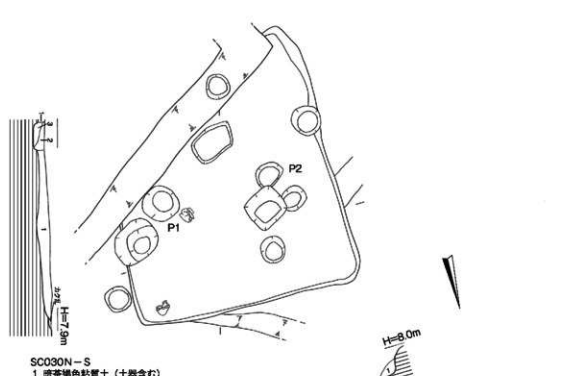
以下、遺構種別ごとに報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における世界測地系による10m単位の平面座標を基準とした英字（北から南にＡ～Ｃ）と数字（西から東に１～３）の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第４図参照）。

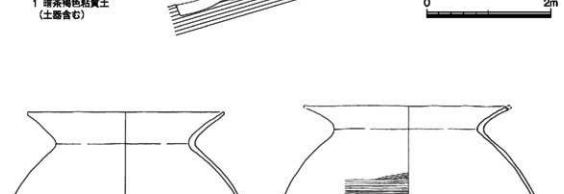
１）竪穴住居（ＳＣ）

ＳＣ０３０（第４、５図）Ｂ－１・２区で検出した。南北方向4.3m、東西方向3.6mで、隅丸長方形プランである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、深さは20㎝ほどである。主柱穴は、２本確認でき



第４図　調査区全体図（1/100）

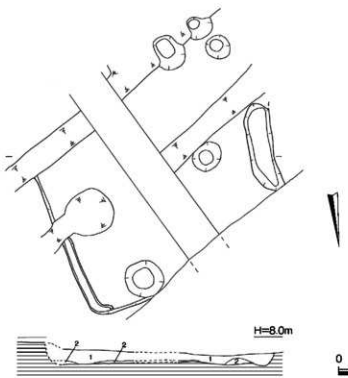




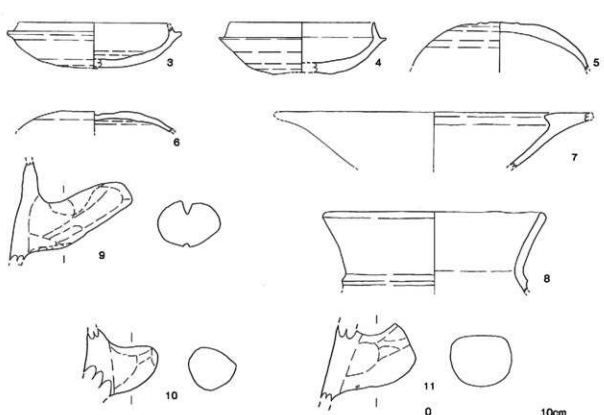
第５図　SC030実測図（1/60）および出土遺物（1/3）

（Ｐ１、Ｐ２）、柱の間は1.7ｍである。柱穴の大きさは0.45ｍほどで、深さ20～40㎝であった。南側の一部は旧建物の基礎に壊されているが、今回の調査では残りの良かった遺構である。

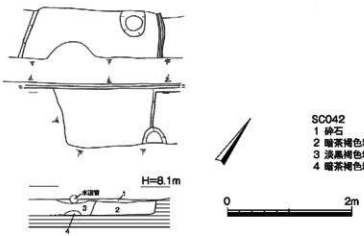
出土遺物（図５）１、２は壺である。１は口径15.4㎝を測る。器壁は非常に薄く、調整は摩滅している。色調は淡灰褐色である。２は口縁端部と胴部から底部が欠けている。最大径は20.6㎝。黒斑があり、胎土に１～２㎜程の砂礫を含む。色調は灰黄褐色である。年代は古墳時代初め頃。



SC031
1 暗茶褐色粘質土（土器含む）
2 暗黄褐色粘質土（ローム混じり）



第6図　SC031実測図（1/60）および出土遺物（1/3）



第7図　SC042実測図（1/60）

ＳＣ０３１（第４、６図）調査区のＡ－２、Ｂ－２で検出した。東側の一部は壁までよく残っていたが、南側を中心に旧建物の基礎、撹乱により壊されていた。また、竪穴住居中央部の北西から南東にかけて水道管が通っており掘削はできなかった。規模は東西3.7m、深さ0.1～0.25mを測る。東側の一部では幅0.18m、深さ0.06mの壁溝が回る。主柱穴は撹乱・水道管などにより検出されなかった。また、西側の壁はそれ自体を土坑と考えられなくもないが、東側の住居壁面と平行に走り、さらに周辺には同時期の遺構が無かったので竪穴住居の壁と考える。

出土遺物（第６図）３～６は須恵器の坏である。３、４は身で、３は口縁端部を欠く、最大径約13.8cmである。４は底部を欠いているが、高さ約4.1cm、最大径13.2cmに復元できる。５、６は蓋である。７は高坏の口縁部付近で、高さ4.3cmが残る。８は壺の口縁部から肩部にかけてであり、口径約16.6cmである。９～11は把手である。９は牛角付把手である。把手の上下に切込みが確認できる。上部の切込みは幅0.7cm、長さ5.5cm、深さ0.1～1.3cmである。切込みの深さは先端に行くほど浅くなる。下部の切込みは幅0.5cm、長さ2.7cm、深さ0.1～0.4cmと浅いが、下部の切込みも先端に行くほど浅くなる傾向にある。11は把手の先が欠損しているように観察できる。欠損部分は真直ぐに切られた訳ではなく、凹凸が確認できる。年代は６世紀末～７世紀初め頃。

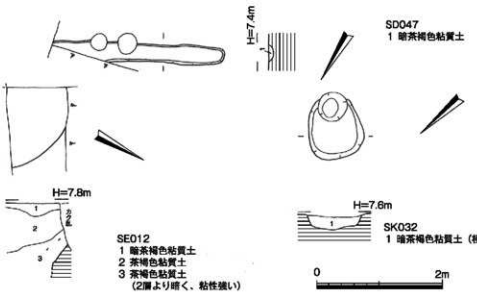
ＳＣ０４２（第４、７図）調査区のＡ－２区で検出した。１方の壁のみを検出し、あとは旧建物の基礎・撹乱、SC031に切られる。東壁では、壁溝は無く、深さ0.22～0.24mであった。主柱穴は不明である。出土遺物は須恵器片が数点出土したのみで、実測に堪えなかったが、SC031に切られており６世紀末より古い年代が与えられる。

２）溝（ＳＤ）

ＳＤ０４７（第４、８図）調査区のＡ－２・３で検出した。浅い溝で深さ0.04mであった。埋土は暗茶褐色粘質土で、土器の破片が数点出土した。

３）井戸（ＳＥ）

ＳＥ０１２（第４、８図）調査区のＢ－２・３、Ｃ－２区で井戸全体の１/４ほどを検出した。南側は調査区外、西側は旧建物の基礎により掘削不可能ということもあり、井戸の底までは掘削していない。コンクリートの下、１層は暗茶褐色粘質土、２層は茶褐色粘質土、３層は茶褐色粘質土（２層より暗く、粘性強い）であり、須恵器の破片が検出された。底まで掘削できたわけではなく、土器も破片のみなので詳しい年代等は差し控える。



第８図　SD047実測図、SE012実測図およびSK032実測図（1/60）

土坑(ＳＫ)

ＳＫ０３２（第４、８図）調査区のＡ－１・２区で検出した。直径0.85m、深さ0.14～0.20mの土坑である。土層は暗茶褐色粘質土（極少量ローム混じり）であった。土器は検出されたが、図化に耐えなかった。

4）そのほかのピット（ＳＰ）、包含層出土遺物

最後にピット（ＳＰ）、包含層出土遺物について、報告を行う。

ＳＰ００３（第４図）隅丸方形のピットである。２段掘で底までの深さは0.29mである。

ＳＰ００５（第４図）隅丸方形のピットである。２段掘で底までの深さは0.36mである。

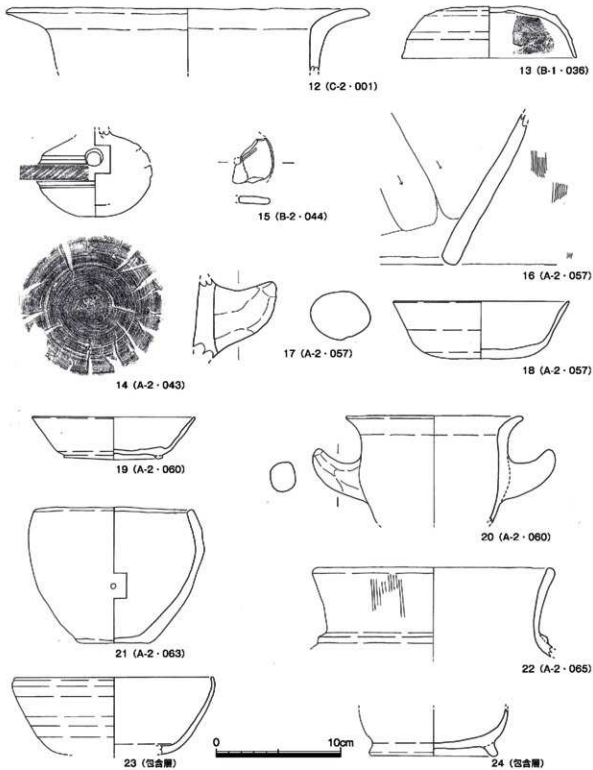
ＳＰ０１１（第４図）隅丸方形のピットである。２段掘で底までの深さは0.19mである。

ＳＰ０２８（第４図）隅丸方形のピットである。２段掘で底までの深さは0.4mである。

ＳＰ０５７（第４図）隅丸長方形のピットと考えられ、一部は旧建物の基礎掘りに切られる。２段掘で底までの深さは0.61mである。

これら５基のピットは掘立柱建物の可能性を考えたが、旧建物の基礎等により周りが壊されており掘立柱建物は建たない状況であった。

ピット（第４、９図）以降出土遺構番号順に説明を行う。12は甕の口縁から頸部にかけてである。13は須恵器の坏蓋である。内部に逆「く」の字状の線刻が確認できる。14は須恵器の廻である。頸部より上は欠損している。胴部最大径は9.1cmである。15は粘板岩製の紡錘車である。厚さ６mm、径約4.5cmに復元できる。16、17は甑である。16は甑の底部付近で一部が残る。外面にはハケ目がみられる。17は把手である。18は土師器の坏身である。口径は約14cmに復元でき、高さ4.5cmである。19は須恵器の坏身である。口径は約13cmに復元でき、高さ3.4cm、底径7.8cmである。焼成は良好。20は土師器の釜形土器である。口径は約14.2cmに復元できる。底が窄まるような形をみせているため、甑ではなく釜形土器とした。30%ほど残存しており、外面の調整は不明で、内面はナデである。21は無頸壺である。口縁部は窄まり、胴部上位に最大径がくる。口径12.3cm、高さ10.7cm、最大径13.8cm、底径5.6cmである。１箇所、焼成前の穿孔が確認できるが、反対側は残っていない。外面は器壁が荒れ調整は不明である。内面はナデである。22は壺である。口径は約18.4cmに復元できる。



第9図　ピットおよび包含層出土遺物（1/3）

外面はハケ目調整、内面上部はナデが確認できる。また、頸部に1条の突帯を回らす。23は須恵器の碗である。口径約15.6cm、高さ6.1cmが残る。調整は回転ナデである。24は須恵器の坏身である。底径約10.2cmに復元できる。なお、以上の遺物は、遺物番号の横にグリッド名と出土遺構を記載している。

3．結語

那珂遺跡群第173次調査では、南西・西・南東側の大部分を旧建物の基礎に破壊されていた。その様な状況下で、島状に残った土地に検出できた遺構もある。建物が建ちそうなピットもあったが、周りが破壊されており単体での検出となった。遺構が比較的残っていたのは北側であった。また、北側では3棟の竪穴住居が検出された。SC030が古墳時代初め、SC031が6世紀末、SC042はSC031に切られておりそれよりも古い年代が与えられる。

SC031では須恵器のほか、牛角付把手が出土した。表1、第10・11・12図では福岡市内で出土した牛角付把手を、古墳時代を中心に集成した。なお、報告書が無かった遺跡もあり、すべて確認できた訳ではない。

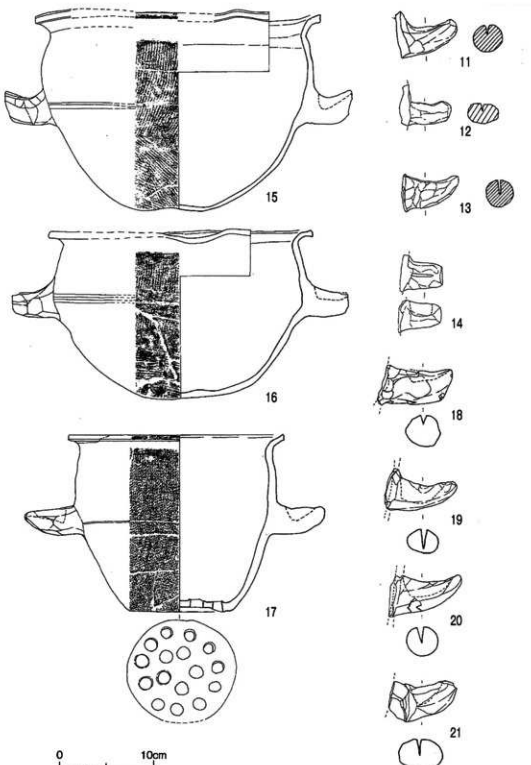
甑はもともと半島の土器であり、古墳時代前期に西新町遺跡で確認できるが、継続はしなかったようである。その後、古墳時代中期になり近畿地方を中心に確認されるようになり、次第に普及する。

表1を見ると、那珂遺跡群で出土した那珂第35・173次の2例だけが6世紀末から7世紀初めとなっている。それまでは牛角付把手の切込みは、上からの切込みだったものが、6世紀末から7世紀初の那珂遺跡群出土例は切込みが両方から開けられるか、または貫通している。貫通しているものは日本、韓国で確認できるが、切り込みが両側からあけられ、貫通していないものは調べた限りでは確認できなかった。

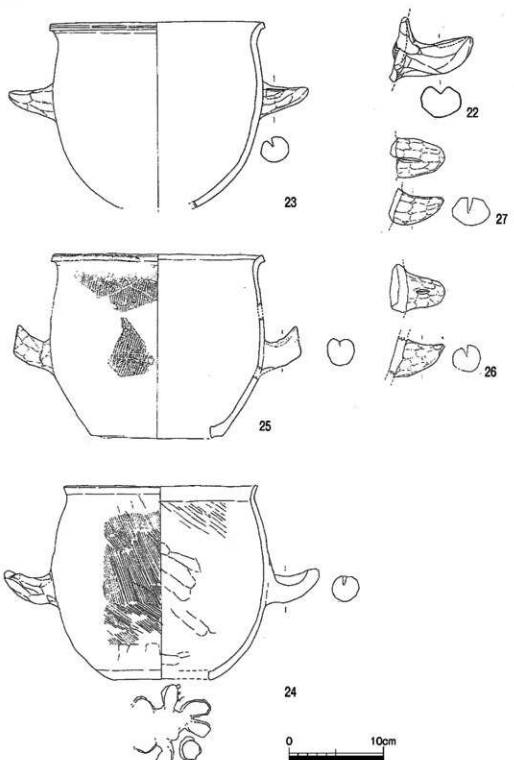
NO	遺跡名	遺構	資料	把手（穿孔）・底部等	時期	報告書
1	那珂遺跡群35次	SK17	把手	把手中央に溝状の切込み（貫通）	6c末~7c初	那珂10
2	那珂遺跡群173次		把手	把手中央に両側から溝状の切込み	6c末	本報告
3	有田遺跡群30次	Pit	把手	把手中央上部に溝状の切込み		有田小田部5
4	有田遺跡群47次	SD02	把手	把手中央上部に溝状の切込み	8c中?	有田小田部5
5	有田遺跡群82次	SC01	把手	把手中央上部に溝状の切込み	古墳初	有田小田部7
6	城田遺跡第2次	SC01	把手	把手中央上側に溝状の切込み	6c中葉	金武5
7	吉武遺跡群1次	SD05	甑	把手中央上部に溝状の切込み 底部の穿孔は中央に円、放射状に楕円	5c中頃~後半	吉武遺跡群Ⅰ
8	吉武遺跡群1次	SD18	把手	把手中央上部に溝状の切込み		吉武遺跡群Ⅰ
9	吉武遺跡群1次	SX50	把手	把手中央上部に溝状の切込み		吉武遺跡群Ⅰ
10	吉武遺跡群2次	SK04	把手	把手中央上部に溝状の切込み		吉武遺跡群Ⅳ
11	吉武遺跡群2次	SK05	把手	把手中央上部に溝状の切込み	TK208	吉武遺跡群Ⅳ
12	吉武遺跡群2次	SK16	把手	把手中央上部に溝状の切込み		吉武遺跡群Ⅳ
13	吉武遺跡群2次	SK21	把手	把手中央上部に溝状の切込み	TK208	吉武遺跡群Ⅳ
14	吉武遺跡群2次	pit	把手	把手中央上部に溝状の切込み		吉武遺跡群Ⅳ
15	吉武遺跡群1・2次Ⅳ区	SD07	釜形土器	胴部中央に一条沈線 把手中央上部に溝状の切込み 底部穿孔無し	古墳時代	吉武遺跡群Ⅷ
16	吉武遺跡群1・2次Ⅳ区	SD07	釜形土器	胴部中央に二条の沈線 把手中央上部に溝状の切込み 底部穿孔無し	古墳時代	吉武遺跡群Ⅷ
17	吉武遺跡群1・2次Ⅳ区	SD07	甑	胴部中央に一条沈線 把手中央上部に溝状の切込み 底部平底、円形の穴を16個穿つ	古墳時代	吉武遺跡群Ⅷ
18	吉武遺跡群1・2次Ⅳ区	SD07	把手	把手中央上部に溝状の切込み	古墳時代	吉武遺跡群Ⅷ
19	吉武遺跡群1・2次Ⅳ区	SD07	把手	把手中央上部に溝状の切込み	古墳時代	吉武遺跡群Ⅷ
20	吉武遺跡群1・2次Ⅳ区	SD07	把手	把手中央上部に溝状の切込み	古墳時代	吉武遺跡群Ⅷ
21	吉武遺跡群1・2次Ⅳ区	SD07	把手	把手中央上部に溝状の切込み	古墳時代	吉武遺跡群Ⅷ
22	吉武遺跡群1・2次Ⅳ区	SD07	把手	把手中央上部に溝状の切込み	古墳時代	吉武遺跡群Ⅷ
23	吉武遺跡群9次	SK201	甑	把手中央上部に溝状の切込み	6c後半~7c初	吉武遺跡群Ⅹ
24	吉武遺跡群4次	SD01	甑	把手中央上部に溝状の切込み	5c後半	吉武遺跡群Ⅹ
25	吉武遺跡群4次	SD01	甑	把手中央上部に溝状の切込み	5c後半	吉武遺跡群Ⅹ
26	元岡・桑原遺跡群18次	SD41	把手	把手中央上部に溝状の切込み	Ⅳa~Ⅵ	元岡・桑原遺跡群16
27	元岡・桑原遺跡群18次	SD102	把手	把手中央上部に溝状の切込み	Ⅳb~Ⅴ	元岡・桑原遺跡群16

第1表　福岡市内出土牛角付把手集成表

第10図　福岡市内出土牛角付把手１（1/4）



第11図　福岡市内出土牛角付把手２（1/4）



第12図　福岡市内出土牛角付把手3（1/4）

1. 全景写真1（上空東から）

2. 全景写真2（上空南から）

図 版 2

3. SC030（南東から）

4. SC030（北西から）

5. SC030遺物出土状況１（南西から）

6. SC030遺物出土状況２（東から）

7. SC031（南から）

8. SC031断面（北から）

9. SC042（南から）

10. SC042断面（南東から）

11. SE012断面（北東から）

12. SK032断面（北西から）

13. SP043遺物出土状況14（東から）

14. SP063遺物出土状況21（南東から）

図 版 4

報告書抄録

ふりがな	なか81
書名	那珂81
副書名	―那珂遺跡群第173次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1392集
編著者名	清金良太
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号　　TEL 092－711－4667
発行年月日	2020年3月25日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
那珂遺跡群（なかいせきぐん）第173次	福岡市（ふくおかし）博多区那珂（はかたくなか）1丁目148.143	40132	0085	33°34′10″	130°26′10″	20180416～20180618	301	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
那珂遺跡群第173次	集落	弥生時代～古代	竪穴住居、井戸 土坑、溝	弥生土器、土師器、須恵器	弥生時代終末～古代の集落を確認

要約	今回の調査では近現代による攪乱が酷く、また前の建物基礎が残るなど遺跡の残りとしてはよくなかったが、竪穴住居３棟、井戸１基、溝１条、土坑１基を検出した。竪穴住居の年代は古墳時代初め、古代の住居跡か。井戸は建物基礎の関係で一部しか掘削していないが、古墳時代後期のものであろう。

那珂（なか）　81

―那珂遺跡群第173次調査報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1392集

2020年（令和２年）３月25日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　株式会社ホンド印刷
福岡県福岡市東区松田３丁目10－32